

西部邁 発言① 「文学」 対論

西部邁発言①「文学」対論 目次

第一章 古井由吉×西部邁

一 言葉の危機 6

古井由吉×西部邁

二 文学と人間の時代 54

古井由吉×西部邁

第二章 秋山駿×加賀乙彦×西部邁

一 人生の表現 88

秋山駿×西部邁

二 戦争という廃墟 125

加賀乙彦×秋山駿×西部邁

第三章 辻原登×西部邁

一 物語の源泉へ 162

辻原登×西部邁

二 ファシスモと文学 204

辻原登×西部邁

解説

対話としてのアジテーション 富岡幸一郎

246

第一章 古井由吉×西部邁

一 言葉の危機

古井由吉×西部邁

司会…富岡幸一郎

牢獄にあった青春時代

西部 ご記憶かどうか、もうだいぶ前に古井さんと軽い接触があつたんですよ。古井さんは昔からたくさんの文学賞をもらつておられるので何度目の受賞なのかわかりませんが、『中央公論』で……。

古井 ああ、ご一緒に。思い出しました（笑）。

西部 四十二、三歳の頃になるのかな、僕が吉野作造賞、古井さんが谷崎潤一郎賞で中央公論社から同時に受賞しているんですね。それで受賞パーティでお見かけした。その雑誌には「受賞の言

葉」という枠があつて僕も書いたんですが、古井さんの谷崎賞受賞の言葉を讀んだら、御本人を前にしてあげすけに言うのは憚られますが、ともかく「ひゃあ、名文だ！」と思つた。内容はよく覚えてませぬけれど、こういう日本語というものがあるのかとえらく圧倒されました。僕も社会科学という不粋な分野では文章家と言われてたんですけれど（笑）、いやあ、参つたなど。それが最初の記憶だつた。

ところがいまになつて振り返ると、それよりずっと前、僕のほうには勝手に古井さんとの接触体験があるんです。僕は二十五歳で結婚したんですが、その頃、学生運動をやめて風来坊をやつてまして、小説を讀むなどという精神的余裕も好みもないときだつた。でもかみさんが文学好きで、札幌から出てくるときに翻訳本を持つてきていたんですね。中央公論社かな、黒いカバーのチェーフ全集があつたので、眠れぬ夜に、主として短篇集を讀んでたんだ。小説家を前にくどくど言うのも恥ずかしいから結論だけ言いますが、ものすごく面白かつたけれど同時に、文学というかフィクションなるものの限界まできているような気がしてね。一言で言うくと、神を信じられなくなつた人間たちが、それでも神を求めて彷徨う、それがチェーホフの精神なのだと思われました。これでも高校生の頃から小説はちょこまか讀んでたんですが、「ああ、これで小説を讀むのはお仕舞いだな」と思つたんです。

でもその後しばらくして、ムージルの『特性のない男』全六卷（新潮社、一九六四年）を、やつ

ぱりかみさんが持つてきていたので、しゃあない、読んでみるかと。あの頃には「ムジール」だったと思うんですが、最近「ムージル」となってますね。

古井 南ドイツからオーストリアではSが濁らないで澄むんです。それから、アクセントが「ム」にあるということで、今はムーシルと呼んでいるようです。

西部 まあ、読んでみたら、内容は覚えてないんですけどえらく印象深かったんですね。ただ、古井さんがその翻訳にかかわっているとは僕のなかにテイクノートされなかつた。ずいぶん経ってから、ああそうかと。

古井 僕は中篇小説のほうですけれどね。

西部 あれから数えれば四十年ぶりによくお会いしてることになる（笑）。

古井 それまで僕が何をしていたかというところ、大学院を出てから金沢（大学）へ行つたんですよ。東京は高度成長期のただなかでしたけれど、あそこはまだ高度成長が及んでいない、無風地帯だったんだ（笑）。三年のあいだ、のべつ研究室に籠もりきりで、まあ、難しい本を読んでいたわけです。それから東京に帰ってきて間もなく、プロッホとかムーシルの翻訳を任せられて、学校（立教大学）へ出るほかは朝から晩まで翻訳に取り組んでいた。

夏目漱石がロンドンから帰って何年目かに書いた『道草』（一九一五年）のなかにあるでしょう。若い学生と一緒に歩いている。と、つい先だつて牢獄から釈放された女の話題になる。芸者をし

ていた若い頃に男を殺して懲役を二十年ばかしくらってた女なんです。すると漱石が、俺も同じだ、牢獄にいたようなものだ、学校と図書館の中で暮らしたんだから、と学生に言うんです。それを當時思い出して、ひょっとして俺もそれになりかけてるんじゃないかと（笑）。まさか作家つてものになるとは思ってたなかった。どこか背を向けてたんでしょね、高度成長の突っ走りに。一応は大学に勤めてるんだから少ないといえどもそれ相応の収入はある。だけど新聞も取らなかつたし、ラジオもテレビもない二年くらいがありました。

西部 金沢は西田幾多郎の出身地ですね。その頃はまだ、哲学的な雰囲気はありましたか。

古井 それははつきり言ってます。ただ、学者を尊重する雰囲気だけ、あつたんですよ。

西部 そういう意味じゃあ、やっぱり京都の出店みたいな場所ということですかね。

古井 ええ、昔の雰囲気の名残にはひたれた。ついでに酒呑みになつちやつたけど（笑）。

文体は個人のものにあらず

西部 僕はいいい読者とは言えないけれど、古井さんのものとはときどき読ませていただいていたので、今日はお会いできて嬉しいんです。というのもまず、古井さんは後藤明生さんたちと『文体』という季刊誌を出されていたわけですが（一九七七〜八〇年）、文体、スタイルとは何ぞやというこ

とのなかに、古井さん独特の口調で、スタイルつてのは個人のものではないんだとおっしゃっているんですね。及ばずながら僕も似たようなことを考えざるを得ないと思っていた頃に、古井さんの意見に会った。そのあと司会の富岡さんのインタビュアー（『すばる』一九八九年。「作家との一時間」所収）の中でもそのことに言及されていますね。

古井 皮肉なことに、「文体」と名乗ったわけです。同人が四人いて、他の三人（後藤明生、坂上弘、高井有二）は、自分の文章の文体を頼みにしてる。編集後記で僕だけが言うのね、「文体は我々にはないんだ。ないところから出発してるのだ」と。

文体とは何か。西部さんがおっしゃったように、個人のものではないんだな。たとえば手紙の書き方に出るのが文体なんだ。公の文書を作るときに出るのが文体なんだ。小説もそこから始まっているはずなんですよ。ポーの『黒猫』（一九四三年）は陳述書の形なんです。あれが文体なんです。「これから私が報告するところのことは……」と始まり、「ほとんどだれも信じてくれないだろう。しかし私は事実のほかは何も語らない」という調子です。昔の、たとえば異端の疑いをかけられた修道女が、やっぱりそういう文章で始める。僕は近代小説の原型はそれじゃないかと思ってるんですよ。ところが翻って我が身はといえば、そんな文体、持っていない（笑）。

西部 文学というよりも文芸評論方面で、ほとんど口癖のように「あいつには文体がある」とか「奴には文体がない」とか、小林秀雄まで戻れば「思想とは文体なり」という言い方がされている。

〈プロフィール〉

西部 邁（にしべ・すすむ） 1939年北海道長万部生まれ。2018年1月没。思想家、評論家、経済学者。東大経済学部在学中、東大自治会委員長・都学連副委員長・全学連中央執行委員。横浜国立大学助教授、東大教養学部助教授を経て東大教授、退職。『経済倫理学序説』吉野作造賞、『生まじめな戯れ』サントリー学芸賞・正論大賞、『サンチョ・キホーテの旅』芸術選奨文部科学大臣賞、受賞。『六〇年安保—センチメンタル・ジャーニー』、『妻と僕—寓話と化する我らの死』、『ファシスタらんとした者』など著書多数。雑誌『発言者』主幹、『表現者』顧問、『北の発言』編集長など。

古井由吉（ふるい・よしきち） 1937年生まれ。小説家、ドイツ文学者。『杏子』芥川賞。『栖』日本文学大賞受賞、『樞』谷崎潤一郎賞、『中山坂』『眉雨』川端康成文学賞、『仮往生伝試文』読売文学賞、『白髪の唄』毎日芸術賞、受賞。『古井由吉自撰作品（全8巻）』河出書房新社。

加賀乙彦（かが・おとひこ） 1929年生まれ。小説家、精神科医（犯罪心理学。本名小木貞孝）。『フランドルの冬』芸術選奨文部大臣新人賞、『帰らざる夏』谷崎潤一郎賞、『宣告』日本文学大賞、『湿原』大佛次郎賞、『永遠の都』芸術選奨文部大臣賞、『雲の都』毎日出版文化賞特別賞。日本芸術院賞、受賞。旭日中綬章、文化功労者。

秋山 駿（あきやま・しゅん） 1930年生まれ、2013年没。文芸評論家。「小林秀雄」群像新人文学賞、『人生の検証』伊藤整文学賞、『信長』毎日出版文化賞・野間文芸賞、『神経と夢想 私の「罪と罰」』和辻哲郎文化賞、受賞。日本藝術院会員。従四位。

辻原 登（つじはら・のぼる） 1945年生まれ。小説家。神奈川近代文学館館長。『村の名前』芥川賞、『翔べ麒麟』読売文学賞、『遊動亭円木』谷崎潤一郎賞、『枯葉の中の青い炎』川端康成文学賞、『花はさくら木』大佛次郎賞、『許されざる者』毎日芸術賞、『冬の旅』伊藤整文学賞、日本芸術院賞・恩賜賞、紫綬褒章。

富岡幸一郎（とみおか・こういちろう） 1957年生まれ。関東学院大学文学部比較文化学科教授、鎌倉文学館館長。『戦後文学のアルケオロジー』、『内村鑑三 偉大なる罪人の生涯』、『仮面の神学 三島由紀夫論』、『使徒の人間 カール・バルト』、『非戦論』、『最後の思想 三島由紀夫と吉本隆明』、『川端康成 魔界の文学』、『虚妄の「戦後」』など著書多数。

西部 邁 発言①「文学」対論

2018年5月10日 初版第1刷印刷

2018年5月20日 初版第1刷発行

著者 西部 邁

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル2F

TEL: 03-3264-5254 FAX: 03-3264-5232 振替口座 00160-1-155266

装幀／宗利淳一

印刷・製本／中央精版印刷

組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1715-6 © Susumu Nishibe 2018, printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。